

14 NASH 患者への食事指導介入効果の検討

深澤 尚子・石川 達\*・窪田 智之\*  
吉田 俊明\*

済生会新潟第二病院栄養課  
同 消化器内科\*

15 臍頭十二指腸切除 (PD) 後 10 年の経過で肝不全状態となり、栄養療法で社会復帰が可能となった 1 例

戸枝 路子・小師 優子\*・堂森 浩二  
山田 一樹・河内 裕介・五十嵐正人  
須田 剛士・村山 稔子\*・青柳 豊  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器内科学分野  
同 栄養管理部\*

症例は 50 歳代、女性。

【主訴】腹部膨満、下腿浮腫。

【現病歴】平成 13 年、近医で臍頭部背側後腹膜腫瘍に対し PD (Child 変法再建) が施行された。病理結果は mature cystic teratoma であった。その後、経過中に著明な脂肪肝を呈し、平成 22 年 6 月頃より腹水、下腿浮腫が出現、徐々に増悪するため、平成 23 年 1 月に同院へ入院した。全身管理を行うも改善が認められず、同年 2 月に当院へ紹介、入院となった。入院時生化学検査は、肝不全状態を示し、CT 上肝は萎縮、中等度の腹水貯留が認められた。音響放射圧を用いて測定された肝内せん断弾性波速度は肝硬変に匹敵する値を示した。入院後、推定一日必要総エネルギー所要量を中心静脈栄養で開始し、経腸成分栄養の併用を経て、大量の臍酵素製剤補充下に食事へと移行した。各ステップで体重、血清アルブミン値、PT に加え、非蛋白呼吸症、ApoB を栄養指標とすることで、病態悪化のリスクを回避することが可能であった。約 3 ヶ月後には肝萎縮、脂肪肝は著明に改善し、腹水は消失、肝硬度は F3 程度へ改善した。

【考察】臍切除後の脂肪肝は、臍外分泌機能低下による脂質を主とした吸収不良を背景として生じる。吸収される 3 大栄養素の偏りが肝への脂

肪沈着を助長すると推察され、Apo B の合成低下に伴う、肝からの VLDL 分泌障害はその一因と考えられる。

16 肝臓病教室参加者数の地域別推移

—現状と問題点—

丸山 由華・石川 達\*・深澤 尚子\*\*  
鈴木 光幸\*\*\*・阿部 弘子\*\*\*\*  
小山富士子\*\*\*\*・中野ともみ\*\*\*\*  
植木 文\*\*\*\*・中山 陽子\*\*\*\*  
野口 博人\*\*\*\*・長谷川江梨名\*\*\*\*

済生会新潟第二病院事務部  
同 消化器内科\*  
同 栄養課\*\*  
同 薬剤部\*\*\*  
同 看護部\*\*\*\*

17 肝臓病治療における臨床心理士の役割  
～県立中央病院の場合～

早津 正博・吉川 成一\*・有賀 諭生\*  
山川 雅史\*・津端 俊介\*・平野 正明\*  
県立中央病院臨床心理士  
同 内科\*

当院では 2007 年より臨床心理士が常勤、全科対応で勤務しており、肝臓病医療チームとも必要に応じて連携し、患者・家族の心理面のケアにあたってきた。また、2010 年度から立ち上がった肝臓病教室にもメンバーとして加わり、教室において講師を担うなどしてきた。これらの中で担ってきた臨床心理士としての役割は、①診療スタッフへのこころの援助に関する視点の提供、②依頼を受けたケースへの心理的援助、③教室などにおいて、精神保健や予防のための教育や啓蒙活動を行うこと、の 3 つにまとめられる。

診療にあたる医師や看護師も、身体面はもちろんのこと心理面にも関心を向けており、それは患者・家族との信頼関係の構築、ひいては治療効果にまで影響を及ぼすと考えられ、重要なことである。しかし実際には、多忙を極めるなどの現実的